

〈未来〉と〈必然〉

福 沢 将 樹

序章

テンス・アスペクト研究において、「未来」と呼ばれるものの諸用法については、鈴木 (1965)・鈴木 (1979)・高橋 (1973)・高橋 (1985)・高橋 (1986)・田村 (2000) 等によって、既にかなり明らかになっている。鈴木 (1965) は「顕在的 (アクチュアル)」と「潜在的 (ポテンシャル)」の大きく二つに分け、鈴木 (1979) は「アクチュアル」と「非アクチュアル」の二つに分けた。それに対して高橋 (1985) は両者の間に微妙なもののあることを指摘し、更に細かく観察した。高橋 (1986) は形容詞述語文、田村 (2000) は名詞述語文についての研究である。

これらの研究では、テンス的な意味を記述する際、「未来」「過去」と「現在」を必ず立て、更に、「水は百度でふっとうする。」のような例を扱う場合、「潜在的」「ポテンシャル」「テンスからの解放」「あらわれるときが特定されない特性」「超越時」のような概念を設けるのが普通である。鈴木 (1979) が「コンスタントな属性の現在」として「現在」の中に含めているのが珍しいところである。

ところが、「未来」の用例と、「現在」「過去」や「超越」と呼ばれるものの用例を見比べてみると、不思議なことに気づく。

1. 形式が二項対立なのに意味が三項 (ないし四項) 対立というのは妥当な分析か？
2. 「超越」はなゼル形で表されるのか？ 「超越」と「現在」ないし「未来」とはどのような関係にあるのか？

突

3. 「現在」は実際には「現在」だけを排他的に表すわけではないが、「現在」と認定してよいのか？

1は、日本語がル形・タ形^{注1)}というように形式が二項対立になっているのに、その分析では、「過去」「現在」「未来」という三項対立や、更に「超越」を加えて四項対立の枠組みが用いられているということである。

2は、「超越」という概念が、単に時間を超越した内容を表すのであれば、ル形を使ってもタ形を使ってもいい筈なのに、タ形で「超越」を表すことは非常に難しいが、それは何故かということである。

3は、次のようなことをどう説明するかということである。例えば「犬が居る」という表現は、しばしば「現在」を表すものと言われる。しかし、実際には現在の瞬間に居るだけでなく、現在より少し前にも居たし、現在より以後暫くの間は居続ける筈である。従って、「居る」は「過去現在未来」を表しているのであって、「現在」だけを排他的に表しているわけではない。

本稿は、これらの原理的な問いに解決を図るための基礎調査である。

第1章 資料

資料には、以下のものを用いた。

- 山田太一「ラヴ」(初出『婦人公論』1983年6月臨時増刊号)^{注2)} 第一場
- ・ト書き・注記は採らない。
- ・文語的表現は採らない。例えば「案ずるより産むが安し」のようなものである。

ル形の用法を調べるために、タ形と対立しうる構文で出現するル形に限定する。

- ・ある種の名詞述語文は採らない。例えば、「わけか」は「わけだったか」と対立するが、ル形に相当する語形が明らかでないので採らない。「名詞という」は「名詞だったという」と対立すると見ることができ、同様の理由で採らない。
- ・ある種の音便形は採らない。例えば「してんだ」は「してるんだ」の

音脱落形であるが、語尾が明らかでないので採らない。

- ・命令・禁止・推量（ウ・ダロウ）は採らない。但し、「するだろう」は「しただろう」と対立するので「する」の部分のみ採る。命令「しろ」は「した」という命令表現と対立すると見ることもできるが、今回は対象から外す。
- ・条件法は採らない。例えば「すれば」「すると」は採らない。「すれば」は「したら」と対立するが、今回は対象から外す。但し「するなら」は「したなら」と対立するので採る。
- ・その他、慣用的にタ形の使われないものは採らない。例えば「名詞だっていい」「名詞だなんだ」「するしかない」「するべき」「するものか（反語）」「することはない（する必要はないの意）」「するわけにいかない」「する必要がない」「することができる」「形容詞いです」「じゃないか（反語）」等は採らない。
- ・「するのだ」は「したのだ」「するのだった」と対立するので、「する」「のだ」のそれぞれを数える。その他の類例も同様である。

第2章 分類の観点

ル形の時間的意味を以下の6つに分ける。

〈未来的〉

〈可能的〉

〈反復的〉

〈現在未来的〉

〈現在的〉

〈非時間的〉

〈未来的〉とは、現在展開されておらず、未来に成立する事態を表すものである。例えば、「じゃ、行くよ」。

〈可能的〉とは、未来に成立しうる可能性を表すものである。例えば、「おいでと言えば走ってくるよ」。宇宙の原理のような法則の例はたまたま扱っ

た範囲にはなかったが、あればこれも含む。例えば「水は100度で沸騰する」のような例である。これは一見現在展開中ではないように見えるが、現在において、いつでも成立しうるという可能性として存在する。但し、法則のうち、時間の観念のないものは、ここに含まれない。例えば「3は1より大きい」。

〈反復的〉とは、現在において反復された事態が展開中であることを表すものである。例えば、「毎朝走ってるよ」。

〈現在未来的〉とは、現在展開中とも、未来に成立(完成)するとも、どちらとも言えるような状況を表すものである。例えば、「ほらほら、行列が通りすぎていくよ」。

〈現在的〉とは、事態が現在展開中であることを表すものである。例えば、「犬が走ってるよ」。

〈非時間的〉とは、時間軸上のいつからいつまで成立するということが言いがたいものである。例えば「そうだよ」「行ったことがないよ」「行くんだよ」「そういう話」。強いて言えば現在の瞬間だけ成立する概念としか言えないものを含む。例えば「駄目だよ」「そうかもしれないよ」のような判断を表すものである。宇宙の原理のような法則の例はしばしば「超時」と呼ばれるが、いつでも成立しうるものなので、ここには含まない。〈非時間的〉は、時間軸上に位置させにくいにも拘らず、タ形に変換した語形が存在する。

第3章 分類の結果

基準時から見た事態の前後関係とのありようから、便宜上、〈未来的〉〈可能的〉〈反復的〉〈現在未来的〉〈現在的〉〈非時間的〉の6つに分けて論じる。

第1項 〈未来的〉

ここに属するものは、基準時から見て未来のある時点において事態が成立することを表すものである。但し、その成立時点が明示されることもあるがされないことも多い。また、「時点」とはいつでもかなり漠然とした時間帯

であるものも多い。とはいえ、基本的に一回性の事態の起こることが想定されており、何度も何度も起こりうるということは想定されていないものである。

大きく分けて〈予定〉〈遠未来〉〈近接未来〉に分けられる。

〈予定〉

発話時もしくは或る基準時から離れた未来の時点に事態が予定されていることを表すものである。その予定は知識として得られているもので、無条件に確実に成立することが確信されている。タ形に変換すると、過去の事態を事実の知識として述べたものになる。

今回の資料には該当する用例が見当たらなかったが、次のようなものである。

- ・論文は30日に締め切られます。(作例)

未来の特定の時点に事態が成立することを表していても、条件や、推定や意志の加わったものは、次の〈遠未来〉に相当する。

〈遠未来〉

発話時もしくは或る基準時から離れた未来のある時点に事態が成立することを表すものである。但し、知識として得られているのではなく、条件がついた上での推定や意志が加わっている。タ形に変換すると、過去のある時点に成立した事態ではなく、過去のある時点に成立し得た事態や、過去のある時点に成立したことが推定される事態を表す。

- ・お父さんがブーブーいわれるだろ。(341C^{注3)})
- ・コインランドリーが怒るわよ、あんなの(と台所へ消える)(345B)
- ・嫁さんになったら、一所に暮すかもしれないんだ。(343C)
- ・こりゃあいかん、こうやって商いの一つ一つにこだわって思いつめたら、完全に鬱病になっちゃう。(346C)

未来に事態が成立することが確かであっても、そこに或る条件のあることが示唆されている。その条件は、明示的に表現されているものもあれば、文脈や常識によって暗示されているものもある。これは、現在の眼前に展開す

る事態を述べるものや、次の〈近接未来〉の例とは異なる点である。

〈近接未来〉

発話時に極めて近い未来に事態が成立することを述べるものである。タ形に変換すると、発話時の直前に事態が成立したことを表す。

買い物行って来る。(347A)

行くよ (と立つ) (343C)

〈近接未来〉と〈遠未来〉は、次の2点で異なる。①〈遠未来〉では、長い時間に亘る事態であっても、未来に成立するのは事態そのものであると捉えることができるが、〈近接未来〉では、未来に成立するのは事態の開始点である。例えば「行くよ」の例では、行きという事態が完成して終了するのはいつのことか不明だが、その事態の開始は発話時の直後であることが明らかである。②〈近接未来〉では事態が直後に成立することが明らかなので、条件が想定されなくてもよい。このように、〈近接未来〉は〈遠未来〉とは若干異なる点がある。しかし、いかにも“未来”の出来事を表しているという点で、次項以下のものとは大きくニュアンスが異なる。

第2項 〈可能的〉

ここに属するものは、基準時から見て未来において、何らかの事態が成立することが暗示されているが、それが可能性としてだけ表されているものである。従って事態の成立は一回とは限らず、条件を満たせば何度でも成立しうるし、事態成立の時点を特定することはできない。

大きく分けて〈成立可能性〉〈可能・不可能〉に分けられる。

〈成立可能性〉

基準時から見て未来に何らかの事態の起こる可能性のあることが表されているものである。従って、未来に事態が起こることと、現在において事態成立の可能性が存在するということとを、両方表していることになる。どちらかと言えば、事態成立が可能というより必然というべきものである^{注4)}。

〈未来的〉との相違点は、未来のある時点において一回だけ起こる事態を表しているのではなく、条件が整えば何回でも起こりうることを表している点である。

・……バレーボールやったって、まぎれるかもしれないが、消えることはない。(350A)

・途端に俺が、ああ今日は疲れたよ、がっくりだ、疲れた疲れたといったら、お前の方はいい損っちゃうだろう？ 発散しなくなる。(347A)

次のように、自然法則を表すものもここに属する。

・水は100度で沸騰する。(作例)

・月は地球の周りを29.5日で回る。(作例)

「沸騰する」の例は、大気が1気圧である、等の条件が明示されていないが、そういった条件が整えば何回でも「沸騰する」という事態の起こることが表されている^{注5)}。

法則のような例は、〈非時間的〉の例のいくつかと合わせて、従来しばしば「不定時」「超時」「超越」などと呼ばれることがあった。それを本稿の枠組みで説明し直すと、上述のようになる。但し、「不定時」はともかく「超時」という捉え方には妥当でない点がある。なぜならタ形に変換すると、過去における成立可能性を表し、過去には成り立ったが現在では成り立たないということを表すからである。

・水は100度で沸騰したものだ。

・月は地球の周りを29.5日で回ったものだ。

「沸騰した」の例は、温度の定義が変わったり、地表の気圧が変わったりすれば、変化しうることである。「回った」の例も、数百万年のスパンで考えると十分に変化しうることである。ただ我々は通常そうした条件を考慮に入れずに例文を解釈することに決めているので、不変の法則であると見做しがちなのである。言い換えれば、「超時」という捉え方は、言語外の常識の問題であって、言語の用法の問題ではないということである。

以上のように、〈成立可能性〉は未来において何らかの事態の起こることが表されているという点で、〈未来的〉に近い面を持っている。しかし、次

の例は、未来に起こる事態というものを想定しにくい。

〈可能・不可能〉

基準時において可能性の存在することを表すものである。但し、具体的な事態が未来に生起するということを想定することは難しく、漠然とした静的な事態が展開しているように感じられる。また、可能動詞やラレルの表すような、狭義の可能に限らない。タ形に変換すると、過去における可能性を表す。

- ・あなたは私なら許せるといった。(351C)
- ・向こうは、あなたがしっかりつかまえていないからよ、なんていう、正直いって、そうそう四十六の女の御機嫌とって、つかまえてられるかって思う。(352B)

このように、〈可能〉を表すものは、未来の意味として解釈するよりも、現在の意味として解釈する方が容易で自然である。

〈不可能〉の例は、そうした傾向がますます強い。

- ・いくらなんでも、そんなことは許せません。(351C)
- ・いや、奥さんは、とてもなさらないと思ったら、喜んでっておっしゃった。(356A)
- ・本当なら、一日がかりの手の込んだ料理をつくって貰ったってバチは当らないと思うんだけどね。(347B)

第3項 〈反復的〉

ここに属するものは、何らかの比較的短時間に行われる事態が、基準時において成立しているとは言えないが、反復されており、その反復された状況が基準時において展開中であるものである。タ形に変換すると、過去における反復を表す。

- ・家は、よく人を呼ぶわね。(356B)
- ・つまらない回覧板、どうして回すのかしら？(346A)
- ・お母さん、淋しくて、昼間から、お酒の匂いをさせてるって。(344A)

しかし、この項目を設定するにはいくつかの点で問題がある。①反復された状況を一つの漠然とした事態と把握することが可能なら、〈現在的〉の中に包摂される。②個々の事態に焦点を当てて見れば、反復と捉える必要はなくなる。この場合、〈成立可能性〉の中に包摂される。③個々の事態が静的な事態を表す形式の場合、静的な事態を表しているのか反復を表しているのか区別しにくい。例えば「匂いをさせてる」の例は、ある時点において持続する事態を表しているのか、最近暫くの間^レの習慣的な事態を表しているのか曖昧である。このように〈反復的〉の例には〈反復的〉と捉えてよいものかどうか迷う例があるが、決して少数ではないことが問題である。

第4項 〈現在未来的〉

ここに属するものは、基準時において何らかの事態が展開しているが、同時に未来においても何らかの事態が成立することを表しているように見えるものである。それは文の解釈上の二者択一ではなく、文意は一通りであるにも拘らず、二つの意味が同時に認められるということである。

大きく分けて〈限界的〉〈非限界的〉〈漸次的〉〈無変化的〉〈遂行的〉の5つに分けられる。

〈限界的〉

当該事態に終了の限界点のあるもので、この限界点に達してはじめて完全に成立したと言えるものである。タ形は基本的にこの限界点を越えたことを表すが、ル形は、間もなく終了の限界点に達しそうなことを表したり、事態が展開中であることを表したりする。

- ・ たしかに、家を出る時、孤独の冷蔵庫にひとり妻を残して行くという気持があることはある。(350B)
- ・ 例えばお前が葬式と婚礼いちどきに出てくたびれて帰ってくる。ああ疲れた今日は疲れたお父さん疲れた、といおうと思って家のドアをあける。途端に俺が、ああ今日は疲れたよ、がっくりだ、疲れた疲れたといったら、……(347A)

「出る」の例は、出(ル)という事態(行為)の開始から終了までにある程度の時間幅があり、間もなく終了の限界に達しそうなことを表す。つまり言い換えれば、間もなく完全に出てしまいそうなことを表す。間もなく終了の限界に達しそうだということは、“間もなく終了の限界に達しそうだという事態”が展開中だということである。

この種のものは、動作の概念を表すだけのように感じられるものも多い。しかし、当該文脈でタ形に換えると、基準時から見て直前の過去の事態を表す意味になるものが多い。タ形に換えることのできないものは、個別の意味的な制約によるものである。この点から考えると、ル形の場合は、基準時から見て現在展開中の事態か、未来に成立する事態を表していると考えべきである。

事態が展開中であるということは先の「出る」の例に見るように、しばしば将然のような意味が感じられる。しかし、展開中であるということと、将然であるということとは、決して二者択一的に背反するものではない。開始から終了までを一つの事態と考えれば展開中に見えるし、終了そのものを一つの事態と考えれば、将然に見えるということに過ぎない^{注6)}。

しかし、ル形がいかにも概念そのものを表しているように見えるものがある。

・そういう女の淋しさを、バレーボールやれ、ボランティアをやれと、
そういつてはねつけるのは、残酷なことだ。(350A)

・いや、私は、他所のお勝手に入るのが趣味でね。(355A)

これらの「……Vのは(が)……だ」の構文では、Vの部分が概念そのものを表しているように見える。実際、タ形に換えてみると非文になってしまう。せいぜい既知の過去の出来事を表しているとしか解釈できない。もしも概念そのものを表すのだとしたら、タ形に換えにくいのも自然なことである。なぜなら、タを含んだ概念というものは想定しにくいから、概念を表すならばル形に相応しいからである。

しかし、これらの例も事態の展開中の状況を表していると考えられることも十分に可能である。「はねつける」の例ははねつけている最中を表し、「入る」

の例は入る動作の途中、又は、入ってしまった後の状態の維持を表す。これらがタ形に換えにくいのは、残酷だと認識する対象として、“はねつけた直後の状況”よりも、“はねつける行為自体”の方がずっと自然だし、趣味であると認識する対象として、“入ってしまった直後の状況（その状況の維持ではなく）”よりも、“入る行為自体”又は“入った後の状態維持”の方がずっと自然だからである。従って、これらの例の文脈でも、ル形が事態の展開を表すと見て差し支えないことになる。

なお、「入る」の例で、入る動作の途中を表すという解釈は〈限界的〉の例だが、入ってしまった後の状態の維持を表すという解釈は〈非限界的〉の例になる。

以上のように、〈限界的〉の例は、事態が間もなく終了の限界に達しそうなことを表すか、事態が展開中であることを表す。前者は未来または将然のように感じられ、後者は現在展開中のように感じられる。後者の解釈は、次の〈非限界的〉でも同様に成り立つ。

〈非限界的〉

当該事態に終了の限界点があるものの、この限界点に達しなくても成立したと言えるものである。タ形は基本的に当該事態が開始したことを表すが、ル形は事態が展開中であることを表す。そのため、タ形が事態の開始後展開中を表し、ル形が展開中を表して、同じ文脈でル形もタ形も使えるということがしばしば起こる。あまり典型的な例はないので例を補う。

- ・トランペットの音が鳴り渡る。 (作例)
- ・浮気をされたって怒鳴るだけです。(352B)
- ・とんでもないってしらばっくれるのはひどいでしょう。^{注7)} (353A)

「しらばっくれる」の例は、一見概念そのものを表しているように見えるが、〈限界的〉のところでも論じたように、事態が展開中であることを表していると考えて差し支えない。

〈限界的〉の場合は未来又は将然の意味の感じられるものがあつたが、〈非限界的〉の場合はそうしたものはないか、非常に稀で、現在展開中の意味に

感じられるものが殆どである。

〈漸次的〉

当該事態が漸次的に進行し続けることを表すもので、〈非限界的〉のやや特殊なものである。タ形は必ずしも終了限界点を越えたと考える必要はなく、事態の展開中の途中の時点を超えただけで、更に展開し続ける場合もある。そのため、〈非限界的〉と同様に、同じ文脈でル形もタ形も使えるということがしばしば起こる。

- ・そういう時期に、亭主ともろくにセックスをせず、歳月だけが、ただいたずらにすぎて行く。(350A)
- ・わり切ろう、忘れちまおう、目をつむってつっ走って、きり抜けちまおうと、ぐぐーと落ち込みそうになるのを、ぐぐぐと（操縦桿を上にあげるような仕草で）もちあげて、やっと断崖の上であるところの日曜日に手をかけて、よよっとのぼって、……(346C)

以上のように、〈限界的〉〈非限界的〉〈漸次的〉の場合、事態がこれから成立・終了するという将然の意味か、事態が展開中であるという意味を表す。そして、このような違いは、事態をどう把握するかによる。このような、将然の意味か展開中の意味かが明瞭でない例は、殆どが以上の3類型の中に収まる。しかし3類型に収まりきらない稀なケースもいくつかある。次の〈無変化的〉〈遂行的〉はその一つである。

〈無変化的〉

基準時における何らかの静的な事態が、今後失われることがないことを表すものである。結局何も変化がないのだから、第5項の〈現在的〉に似ている筈だが、実際はかなり異なる印象を受ける。〈現在的〉はいかにも現在の事態だけを表すように見えるが、〈無変化的〉は、未来に何も事態が起こらないことを述べているにも拘らず、未来の事態を表すように見える。

- ・磁気テープ四十パーセントを維持するっていうんですから、高値六千円と見たって私はいいと思います。(348A)

- ・俺に、ほっとかれるなんて嘆くな。(351A)
- ・ひとりの女性の人生を、閉じこめたまま、ほうっておくんですか？
(353C)

- ・お父さんの反論も、たちまち頭に浮ぶけど、ま、やめとくよ。(342C)

この不思議な例は、次のように考えると理解できる筈である。単純に現在の状態のまま維持することを表すのではなく、現在において存在する可能性が未来に失われることを表すのである。例えば「維持する」の例では、現在40パーセントのシェアがあるが、このシェアはいつ低下するか分からない可能性を秘めている。しかし、今後、この可能性を失う——つまりシェアの低下する可能性を失い、シェアが維持し続ける——という意味である。他の例も同様に考えることができる。

このように、未来に可能性が失われるという意味と、現在において可能性が存在するという意味とが表されている。これも〈漸次的〉などと同様、事態をどう捉えるかという問題であり、テンス的意味が矛盾しているわけではない。

〈遂行的〉

発話をすることによって成立したと見做されるものである。タ形にするとごく普通の事態の成立を表すので、ル形にしかない用法である。また動作主が1人称以外だとかごく普通の事態を表すので、動作主が1人称に限られる。

- ・撤回します。(351C)

この例では、撤回という事態がいつ成立するかというと、本人が発話をした以上、発話をした時点において撤回が成立したと見做される。しかし当該文献のこの場面では、この撤回は容易に受け入れられていない。例えば「簡単に撤回するなんていってもらっちゃあ困る。」のような発言が見られる。つまり相手が了承していないために、“撤回が受け入れられた状況”が成立しておらず^{注8)}、撤回を宣言したに留まっている。言い換えれば、宣言しただけでは、“発話行為が受け入れられた状況”は成立しておらず、“発話行為が受け入れられた状況の成立前の状況”であるにすぎない。しかし宣言し

たことは事実であるから、宣言という事態は発話と同時に成立したことになる。

発話の時点で事態が成立したということは、現在の事態を表すということになる。一方で、発話のあと相手が了承することによって実際上の効果が発揮されるということは、未来の事態の成立を意思表示したことにもなる。従って、現在の意味と未来の意味とどちらが表されているのか不明瞭だということになる。しかし、既に述べたように、事態の捉え方によって現在展開中の意味か将然の意味かが決まるという場合があるので、〈遂行的〉の例もその一種であると考えられる。

タ形にすると、単に“撤回の宣言が行われた”というだけにとどまらず、“撤回が受け入れられた状況が成立した”という意味を含むのが普通である。

以上のように、〈現在未来的〉とされたものは、事態の捉え方によって現在の意味にも未来の意味にも見える。

第5項 〈現在の〉

ここに属するものは、基準時において何らかの事態が展開中のものである。いかにも現在の意味が表されているように見え、未来の意味を想定することは難しい。タ形に変換すると、過去における事態の展開中を表す。

- ・ ちょっと聞えない (と水音) (346A)
- ・ ええ、そういうこと、嬉しいわ。(357B)
- ・ 朝からずーっと俺は此处にいるよ。(342A)
- ・ 自分を再発見するような気持ちがあります。(351A)
- ・ 大体こっちがヒーヒー働いている真昼間に、ひとりで酒をのまれてたまるか。(344C)
- ・ あらあの子、また牛乳出しっぱなしにしてるわ (冷蔵庫へしまう音) (346A)
- ・ あなた、表現にこだわるけど、御自分も結構歯の浮くようなことをいうんですよ。(350B)
- ・ 大森製作所でひどい目にあって、その上いう通りに関東化学を買っ

まってるんです。(348A)

詳しく記述すれば1本の論文にならざるを得ないので、詳細は別の機会に譲る。

第6項 〈非時間的〉

ここに属するものは、時間軸の中で事態の成立する時間帯がいつからいつまでということが不可能な概念である。成立の時間帯がありえないにも拘らず、テンスの対立を持っている。従って、本稿の考察の範囲に入るものである。しばしば「(疑似) モダリティ形式」と呼ばれるものもここに属する。

〈非時間的〉の用法は、ル形には非常に多い。今回の資料中、813件のル形のうち、422件がここに該当する。

ここも第5項〈現在的〉と同様、詳細は別の機会に譲り、幾つかの例を挙げるにとどめる。種々の性格があり、分類が難しい^{注9)}。

- ・日曜も家にいないとかいわれてさ、そんなことはないぞ、先々週だって、その前の前の前の週だって。(342B)
- ・なんにもしないからだ。(349C)
- ・大体、ゴルフだって仕事なんだ。^{注10)} (342B)
- ・その通りです。(350C)
- ・笠原です。(347C)
- ・駄目だよ。(341C)
- ・いいから、ちょっと待ってる。(341C)
- ・お茶は結構です。(348B)
- ・根本さん、この頃そういうのの仲介してるんだよ。(342A)
- ・嫁さんになったら、一所に暮すかもしれないんだ。(343C)
- ・どういう苦しみがあり、どういう喜びがあり、どういう志があるか。
(343A)
- ・教育的衝動にかられたっていう感じ (と苦笑) (343C)
- ・そうですか。(356B)

第4章 まとめ

以上、第3章において観察してきた結果を纏める。本稿の纏め方で重要視したことは、ル形とタ形の対応を適切なものにするることである。

ル形の用法		タ形の用法	備考
未来的	予定	歴史	予定表・年表
	遠未来	遠過去	推量・確信
	近接未来	近接過去	
可能的	成立可能性	過去における成立可能性	タ形は歴史または遠過去相当
	可能・不可能	過去における可能・不可能	
反復的	反復的	過去における反復	
現在未来的	限界的(限界前)	限界後	
	非限界的(展開中)	開始後	
	漸次的(展開中)	漸次的(展開後)	
	無変化的(可能性喪失前)	可能性喪失後	
	遂行的(了承成立前)	了承成立後	
現在的	現在的(展開中)	過去における展開中	タ形は歴史または遠過去相当
非時間的			種々の性格あり

指摘すべきことは以下の通りである。

1. 一般に「未来」と呼ばれる用法は、未来のある時点において、事態が成立すると見做されるものである。これは可能性としてではなく、かなり確実に一回だけ成立するということである。
2. 逆に、事態の成立することが可能性としてだけ表され、条件を満たせば何度でも成立しうるものは、未来の側面があるにも拘らず、未来とは見做されない。かといって現在と見做されるわけでもない。
3. 一つの事態で未来の意味と現在の意味とは背反するものではなく、共存しうる。
4. <可能><反復><現在的>は、ル形が現在を表し、タ形が過去を表すという点で、同じ性格である^{注11)}。
5. ル形には時間的意味を表さない用法が少なくない。

これらを基に本稿は以下のことを提案する。

〈可能的〉と〈反復的〉の用法は、特定の時点に一回だけ起こる出来事を表すわけではないが、条件を満たせば未来の時点において出来事が起こることを表す。この未来的な意味を表すために、〈必然〉という概念を提案したい。

- ・〈必然〉とは、条件を満たせば未来に何度でも出来事が成立しうることである。

〈可能的〉の用法は、従来「超越」などとして、テンスの用法から排除される傾向にあったが、〈必然〉という概念を設けることによって、未来の意味と共通する性格を持つことが明らかになる。

逆に、〈予定〉の用法は、現在の状況について全く表しておらず、純粹に未来の事態だけを表すものである。なぜなら、未来の特定の時点において一回だけ起こる出来事を表し、しかも現在における推定や意志が入るわけでもないからである。こうした狭義の未来の用法だけを特に〈未来〉と呼びたい。

本稿で指摘し、提案した重要な点を纏める。

- ・一つの事態で未来の意味と現在の意味とは背反するものではなく、共存しうる。
- ・一般に「未来」とされるものは、未来のある時点において、事態が成立すると見做される用法に見られる。
- ・一般に「未来」とされるもののうち、特に現在と関わりのない用法を、厳密な意味で〈未来〉と呼ぶ。厳密な〈未来〉は〈予定〉の用法にのみ見られる稀な用法である。
- ・条件を満たせば未来に何度でも出来事が成立しうることを〈必然〉と呼ぶ。一般に「超越」とされるものにも〈必然〉としての未来的意味が見られ、一般に「未来」とされるものとの共通性が見られる。

序章で示した問題点をもう一度掲げる。

1. 形式が二項対立なのに意味が三項（ないし四項）対立というのは妥当な分析か？
2. 「超越」はなぜル形で表されるのか？ 「超越」と「現在」ないし

「未来」とはどのような関係にあるのか？

3. 「現在」は実際には「現在」だけを排他的に表すわけではないが、「現在」と認定してよいのか？

この問題点のうち、2については一定の解答を与えたが、残りは論じ残している。〈未来〉と〈必然〉、更には〈現在的〉や〈非時間的〉までも含めたル形の包括的な考察は別稿に譲りたい。

参考文献

- 鈴木重幸 (1965) 「現代日本語の動詞のテンス—言いきりの述語に使われた場合—」 『ことばの研究』2 (『文法と文法指導』(鈴木重幸編、むぎ書房、1972) による)
- 鈴木重幸 (1979) 「現代日本語の動詞のテンス—終止的な述語につかわれた完成相の叙述法断定のばあい—」 『言語の研究』(言語学研究会編、むぎ書房)
- 高橋太郎 (1973) 「動詞の連体形「する」「した」についての—考察」『ことばの研究』4 (『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』(むぎ書房、1994) による)
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(『国立国語研究所報告』82 (秀英出版))
- 高橋太郎 (1986) 「形容詞のテンスについて」『論集日本語研究(一)現代編』(宮地裕編、明治書院)(『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』(むぎ書房、1994) による)
- 高橋太郎 (1990) 「テンス・アスペクト・ヴォイス」『講座日本語と日本語教育第12巻言語学要説(下)』(近藤達夫編、明治書院)(『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失—』(むぎ書房、1994) による)
- 田村澄香 (2000) 「名詞文のテンス的意味の考察」『日本語教育』106
- 福沢将樹 (2000) 「アスペクチュアリティと動詞分類」『国語国文研究』114
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』(くろしお出版)(1993年第3刷を参照した)

AUSTIN, J. L. (1960) 『How to Do Things with Words』 (Oxford) (坂本百大訳
『言語と行為』 (大修館書店、1978) による)

COMRIE, Bernard (1976) 『Aspect』 (Cambridge University Press) (山田小枝
訳『アスペクト』 (むぎ書房、1988))

本稿は、課程博士論文「日本語に基づくテンス・アスペクト体系の研究—アスペクチュアリティーの単語独立性を中心として—」(2000年、北海道大学) 及び、愛知県立大学言語学研究会(2001年3月)における口頭発表「未来と法則—ル形の意味論—」を基にしたものである。但し、資料や、分類方法・纏め方を一新している。本稿を成すまでに直接間接にお世話になった関係の先生方・先輩後輩・同僚の方々・他大学の関係の方々に、深く感謝申し上げます。

【注】

注1) タ形とは、タのついている述語の形式であり、ル形とは、タのついていない述語の形式のことである。動詞には連体形が「る」で終わらないものも多いし、形容詞や名詞・形容動詞述語、一部の助動詞はウ列音で終わらないが、便宜上これらも「ル形」に含める。「非タ形」と呼ぶのが相応しいが、慣用と見た目の便宜(「タ形」と「非タ形」は紛らわしい)によって、「ル形」を踏襲する。

注2) 『現代日本戯曲体系12』(三一書房、1998年4月刊、底本『ラヴ』(中央公論社、1986))による。

注3) 「341C」は「341頁下段」の意味である。同様に、「A」は上段、「B」は中段を表す。

注4) 論理学では可能と必然は対立するが、どちらも様相論理の世界で問題になる概念であるから、同じ枠の中の下位分類としてよいだろう。なぜなら、自然言語の用例では両者の境界が不明瞭だからである。仮に、可能とは“条件が揃えば成り立つ”ことであり、必然とは“反する条件が加わらない限り成り立つ”ことだとしたら、両者の境界を見極めるには現時点でどの程度条件が揃っているのかが分からなければならない。しかし、実際には、条件がまだ揃っていないという前提の話なのか、既に揃っているという前提の話なのかを、文脈から理解するのは至難の業である。

注5) 当該例文を、「水は100度になると、沸騰するのだ」と解釈しようと、「水の

沸点は何度かという、100度である」と解釈しようと、「沸騰する」の部分
は〈成立可能性〉として解釈できる。

注6) これらの論点については福沢(2000)で論じている。

注7) なおこの例は、一般的に「しらばっくれるということはひどいことである」
という意味ではなく、今現在の相手の行為をなじる文脈である。

注8) AUSTIN(1960)によれば、「発語内行為の遂行には、了解の獲得(securing
of uptake)が必要である。」(訳書194頁。傍点・斜体は訳書の通り。)という。

注9) 高橋(1985)の「テンスからの解放」「質的な属性」、田村(2000)の「超越
時」「関係が発話時に認定されたもの」が参考になる。

注10) 物事の関係や性質を表すものは、“似たものを次々と調べていけば、常に同
じ関係が成り立つ”ということになる。その意味では〈可能的〉に似ている。

注11) 未来を表しているとは言いがたい〈現在的〉と〈非時間的〉の用法について
は別の機会に検討する。本稿は未来を表す用法について言えば十分である。